

『万葉集』二六五番歌の考察——「狭野の渡り」を中心に——

安藤 久留美

一、はじめに

長忌寸奥麻呂歌一首

苦しくも零り来る雨か神の埼狭野の渡りに家もあらなくに

〔『万葉集』、卷三、二六五〕

右の歌は藤原定家の

百首歌奉りし時

駒とめて袖うちはらふ陰もなし佐野のわたりの雪の夕暮

〔『新古今和歌集』、冬歌、六七二〕

の本歌として知られている。定家が詠んだ歌は雨を雪に変えただけでなく、そこに馬を配し時刻を夕暮れ時に設定した和歌である。藤原定家が詠んだ歌は「一带を白一色にして降る雪の中を、旅人が一人、馬を進め悩んでいる情景で、

優雅な声調による縹渺とした幽玄な画趣である」^(注二)のに対して、長忌寸奥麻呂が詠んだ歌は降って来る雨のどうしようもなさを訴えつつ、「家もあらなくに」と旅の苦難と寂寞を訴える。

従来、専ら『万葉集』二六五番歌は「神の埼」、「狭野の渡り」の所在地の比定について論じられてきた。その所在は大和国とする説、近江国とする説、紀伊国とする説、和泉国とする説の四説がある。近年に至っても定説と呼べる説はないが、紀伊国を有力とする説がほとんどである。また「神の埼」についての訓説も諸説分かれており、それらは地理的比定に基づく。ただし、そうした地理的比定に留まるばかりで当該歌の歌枕「狭野の渡り」についての考究はあまりされていない。

本稿は歌枕「狭野の渡り」に注目し、『古事記』『日本書紀』『万葉集』などの「渡り」について整理しながら、後の時代に本歌取りされた散文作品内の『万葉集』二六五番

歌「苦しくも零り来る雨か神の埼狭野の渡りに家もあらなくに」を意識した場面を中心に考察していく。

二、二六五番歌の研究史

当該歌における研究史は常に「神の埼狭野の渡り」の所在地の考証であった。この議論は平安時代以来長らく続けられており、それだけに諸説唱えられてきた。

『五代集歌枕』巻下二十九「崎」で「みわのさき」を大和国とし、『八雲御抄』巻第五「渡」でも「みわのさき」「さの渡り」を大和国とした。他、大和説以外の有力説として近江説が対立していた。中村一基氏曰く、近世の国学者たちにより調査・研究されるまで「神の埼狭野の渡り」の所在地は大和説と近江説(注)だったらしいが近世以降に紀伊説が台頭したようだ。そして、その三説を疑った土屋文明氏が新たに「私注」で和泉説を提示した。近代の注釈書は「私注」以外全て紀伊説を採る。

大和説を述べる猪股静彌氏は紀伊説を否定し、

『万葉集』の注釈書は、すべてこれを和歌山県、紀伊半島南端に近い新宮市三輪崎町の地と決めて疑わない。その発端は、契沖が人づてに聞いた地名を、そのまま詠歌の地としたことに由来する説である。そこには、奥麿の旅が何であったとか、二つの地名の関係な

ど何一つ考察されてはいない。(注三)

と述べるが、はたして実際そうであろうか。既に先行研究で指摘される通り神武紀即位前期戊午年六月二十三日の条には二六五番歌と表記が同一の「狭野」が見られる。以下、神武天皇の軍が東征の途中に「狭野」の地を越えて「熊野神邑」に至った記事の一部である。

六月の乙未の朔にして丁巳に、軍名草邑に至り、即ち名草戸畔といふ者を誅つ。戸畔、此には妬撃と云ふ。遂に狭野を越え、而して熊野の神邑に到り、且天盤盾に登り、仍りて軍を引き漸に進む。海中にして卒に暴風に遇ひ、皇舟漂蕩ふ。時に稲飯命、乃ち嘆きて曰く、「嗟乎、吾が祖は則ち天神、母は則ち海神なり。如何にぞ我を陸に厄め、復我を海に厄むる」とのたまふ。言ひ訖へ、乃ち剣を抜き海に入り、鋤持神に化爲りたまふ。三毛入野命、亦恨みて曰はく、「我が母と姨とは、並びに是海神なり。何為ぞ浪瀾を起てて灌溺れしむる」とのたまひ、則ち浪秀を蹈みて常世郷に往でましぬ。(注四)

〔『日本書紀』巻第三、

神武天皇即位前期戊午年六月二十三日の条)

傍線部原文「遂越三狭野一而到熊野神邑」と当該歌「狭野の渡り」が同じ場所である、ということは既に指摘され

ている。また稻飯命が海に入つて鋤持神となり、三毛入野命が常世国に渡つたという畏敬すべき伝承地として「神の埼」の名称であることも主張されている。そして、『万葉集』巻九「大宝元年辛丑の冬十月に、太上天皇・大行天皇、紀伊国幸せる時の歌十三首」の中に

風無の浜の白波いたづらにここに寄せ来る見る人なしに
一に云ふ、「ここに寄せ来も」

右の一首、山上臣憶良の類聚歌林に曰く、長忌寸意吉麻呂、詔に応へてこの歌を作る、といふ。

『万葉集』、巻九、一六七三

という歌があるように「長忌寸意吉麻呂」すなわち奥麻呂が紀伊国への行幸に従つていることも指摘されている。この行幸についての記載は『続日本紀』大宝元年九月の条にも見られ、『万葉集』中にも巻一には「大宝元年辛丑の秋九月、太上天皇、紀伊国に幸せる時の歌（五四〜五六）」という題詞を持つ和歌が三首あり、巻二の一四六番歌には「大宝元年辛丑、紀伊国に幸せる時に結び松を見る歌一首 柿本朝臣麻呂が歌集の中に出でたり」とある。

以上のことは全て既に指摘されていることだが、これらを踏まえてなのか『大日本地名辞書』には「みわが崎と云は紀伊国牟漏郡にて新宮より那智へ行道の海辺なり」と述

べられ、大和説や近江説を紹介するも紀伊説を採用している。また「歌ことは歌枕大辞典」で草野隆氏は「佐野の渡り」は「和歌山県新宮市三輪崎町とその南の佐野町の一带」を指し、そこに「木ノ川が熊野灘にそそぎ、渡し場があったらしい」。そして、『五代集歌枕』や「八雲御抄」が大和国とするのは「奥麻呂の歌に詠歌事情のわかる題詞・左注がないことによる誤認か」と述べられた。

地名所在の考証がされてきた「神の埼狭野の渡り」であるが、ここでは前述したことを踏まえて、現在最も有力であるとされる紀伊説を探ることにする。

さて「家もあらなくに」についても言及しておかねばなるまい。伊藤博氏は万葉歌の型式に「家Ⅱ故郷」と「旅Ⅱ異郷」とを対比^(対比)して嘆きを述べる型式があつたことを指摘する。この伊藤氏の「家」と「旅」の対比は対概念として定説化している。当該歌を旅中の歌と解す注釈書は多数ある。また『新勅撰集』羈旅歌の部立にも入集している。かつての注釈書は「家もあらなくに」を「雨の降るに、雨やどりすべき家もなきよとなり（講義）」、「雨を避くべき家も無いのである（全註釈）」と解していた。つまり、「神の埼狭野の渡り」の周囲には雨宿りできる家がなく住人も建物もない場所であるとされていた。「八雲御抄」巻第五「渡」にも「みわのさき。家なし。さの、渡は家なし

と万葉にもいへり」と記述があるように、もちろん思い浮かべる情景はどのような何もない土地だったわけである。従来はそのように雨宿りする家がない、と解して地理的比定を行っていた。

ただし『講義』『全註釈』のような解釈だけではなく、諸注釈を見るに「家」はA「雨宿りする家」、B「宿るべき家」、C「妻子がいる家」、D「家族」の以下の如く四説に分類できる。「八雲御抄」のようにA「雨宿りする家がない」と解釈されたのは『講義』『全註釈』『大系』『注釈』などの注釈書である。これに派生してかB説の『私注』は「イへは人家であるが、作者を中心に考へれば宿るべき家といふ位の意がこめられて居ると見てよい」と述べ、『窪田評釈』で「家」は、宿を借りるべき家」という意と解釈されている。では近年の注釈書ではどうかというと、総じてC説を採択しているものがほとんどである。ただし、『新全集』のみ「家もあらなくに」を「家の者もいないのに」と訳し「特に旅先の夫が留守居の妻をさしていう」と解す。これはD説に該当する『全集』が「家人とていないのに」と解した流れを汲んでのことだろう。

他、文献や論文を分析するとB説である犬養孝氏は「見わたすかざりやどるべき家一つない茫漠たる景觀」と述べ、久松潜一氏は「とまる宿も見つからないのに雨まで降って来たの意」と解す。また、新垣幸得氏は「途中に人家もな

い磯利の原で、行きなすむが、佐野の渡しを渡らねばならぬ。そこは渡しを渡れば向いは山で家などない山道である。したがって佐野の渡りには家もないというのに、という行く先の不安が明らかに口をついて出て来たのである」と説く。そして、C説である土佐秀里氏「神の埼狭野の渡り」とは、建物一つない荒野というわけではない。もちろん所在が不明なくらいであるから有名な渡し場ではないのだろうが、それでも家屋のいくつかは建っていたのだろう。ただそこに妻のいる「我が家」はない、というのである」と解釈する。

当該歌に対して注釈書『新考』『全釈』『総釈』『全訳注』『全解』は「家もあらなくに」の「家」について「家もないのに」と訳すが、それが「どういう家なのか」については語られない。

どうやら一九七〇年代以降からC「妻子がいる家」説が表出するまで、神の埼狭野の渡りに「家もないのに」ということは、A「雨宿りする家」がない、と解す説が通説であったようだ。A説の諸注釈は「苦しくも降り来る雨」を「今通る神の崎や狭野の渡に雨やどりすべき家も無きに、わびしくくるしくも降りくる雨かな（講義）」、「古人の衣服は、植物性であって、雨に対して反発力が無いので、雨に逢うことを非常に苦しく感じてゐる（全註釈）」など雨宿りもできないほど苦しく降る雨であったと解されて

いた。次にB「宿るべき家」とは、A説と意義を同じく雨を回避すべく「泊まる家」として解している。

しかし『万葉集』の「イヘ」と「ヤド」は意味が異なっている。『万葉集』において「家」とは単なる建造物でないことは諸先学にて既に論じられている。

「イヘ」と「ヤド」の意味の違いについて、一九七〇年『萬葉』で真鍋次郎氏は「たび、やどり、いほりがすべて臨時的・一時的のものであるに對して、いへはすまひ、生活の場として恒久・恒常のものとの考へられてゐたのである」と述べ、「雨やどり等の非恒常生活のものともみることとは、少くとも万葉語としての「家」の用語例に反する」と指摘された。また、真鍋氏は「私注のいはゆる「宿るべき」家といふ、その「宿る」と「家」とは同一事物に對するものではないが、異つた目的意識、異つた姿勢によつて把握せられた、次元を異にする概念であつて、同一線上に並び得るものではない」とB説に批判を述べ、「家もあらなくに」は、兩宿りする建造物がないのではなく、「作者はそこに濡れ衣をあぶり干す等その身辺を何くれと世話してくれる妻の姿を大きく意識し、更にその妻と遠く離れてゐることを感じてゐた」と解した。また、一九八〇年『萬葉』で真鍋氏の説に補説を加え吉井巖氏は「イヘ」と「ヤド」の違いから「いへ」は後に残してきた生活の本拠へ、「やど」はこれから泊すべき場所について用いられていて、旅中にある

て、二つの語に託している作者の心の方向は全く正反對である」と指摘された。

そして「一語の辞典『家』でも「家」は特に「我が家」を意味する例が多く、「家」というのは「妻をはじめとする家族とともに真のやすらぎを得る場であつて、いわば生きていくうえの心のよりどころとも感じていたもの」である、と指摘された。

以上のことから、C説とD説は作者の「心の方向性」としては同じであろうが、「家族」そのものを指すのではなく「妻子がいる我が家」がより適当だろう。

三、『万葉集』「の渡り」歌について

さて、ここまで当該歌の大まかな研究史を述べてきたが、今度は「渡り」について考察していきたい。

まず「渡り」とは渡し場、船着き場、などの意で使用される。平安時代になるとある地域一帯を漠然と指す言葉の「辺り」として「わたり」が使用されるが、万葉の時代にはそのような意では用いられなかつたと指摘されている。^(注十五)「渡り」とあるからには、一方の岸から他方の岸へ渡らなければならぬ。「の渡り」とされている場所が海か川なのか断定できない渡りもあれば、明らかに「対馬の渡り」のように海の渡りもあり、「宇治の渡り」のように川の渡りもある。

『万葉集』には「渡り」を詠む歌が十四首あり、当該歌を含めた「対馬」「狭野」「宇治」「許我」「武庫」などの「渡り」が詠まれている。そのうちの「安の渡り」「去年の渡り」「年の渡り」「出の渡り」などの四首が天の川に關しての和歌である。ここでは「天の川」關連の「渡り」歌と当該歌を除いた残りの九首を見ていく。

三野連名欠けたりの入唐する時に、春日藏首老の作る歌

①ありねよし対馬の渡り海中に幣取り向けて早帰りの作る歌
来ね（『万葉集』卷一、六二）

②玉梓の道行く人はあしひきの山行き野行きにはたづみ川行き渡り鯨魚取り海道に出でて畏きや
神の渡りは吹く風も のどには吹かず 立つ波もおほには立たずとる波の塞ふる道を誰が心いたはしとかも 直渡りけむ 直渡りけむ（『万葉集』卷十三、三三三五）

或本の歌

備後の国の神島の浜にして、調使首、屍を見て作る歌一首并せて短歌

③玉梓の道に出で立ちあしひきの野行き山行きにはたづみ川行き渡り鯨魚取り海道に出でて吹く風もおほには吹かず 立つ波も のどには立たぬ畏

きや神の渡りのしき波の寄する浜辺に高山を隔てに置いて浦ぶちを枕に巻きてうらもなくこやせる君は 母父が愛子にもあらむ 若草の妻もあらむと 家問へど 家道も言はず名を問へど 名だにも告らず 誰が言をいたはしとかも とる波の畏き海を直渡りけむ（『万葉集』卷十三、三三三九）

天平二年庚午の冬十一月、大宰帥大伴卿大納言に任せられ帥を兼ねること旧の如し、京に上る時に、僭從等別に海路を取りて京に入る。ここに羈旅を悲傷し、各所心を陳べて作る歌十首

④たまはやす武庫の渡りに天伝ふ日の暮れ行けば家をしぞ思ふ（卷十七、三八九五）

⑤ちはや人宇治の渡りの瀬を早み逢はずこそあれ後も我が妻（卷十一、二四二八）

⑥そらみつ 大和の国あをによし 奈良山越えて 山背の管木の原ちはやぶる 宇治の渡り 瀧つ屋の阿後尼の原を千年に欠くことなく 万代にあり通はむと 山科の 石田の杜の すめ神に 幣取り向けて 我れは越え行く 逢坂山を（卷十三、三三三六）

⑦大君の命畏み 見れど飽かぬ 奈良山越えて 真木積む 泉の川の 早き瀬を 棹さし渡り ちはやぶる 宇治の渡りの たきつ瀬を 見つつ渡りて 近江道の 逢坂山に 手向けして 我が越え行けば 楽浪の 志賀

の唐崎 幸くあらばまたかへり見む 道の隈 八十隈
ごとに 嘆きつつ 我が過ぎ行けば いや速に 里離り
来ぬ いや高に 山も越え来ぬ 剣太刀 鞘ゆ抜き出で
て 伊香胡山 いかにか我がせむゆくへ 知らずて (巻
十三、三二四〇)

⑧大崎の荒磯の渡り延ぶ葛のゆくへもなくや恋ひわ
たりなむ (巻十二、三〇七二)

⑨麻久良我の評我の渡りの韓楫の音高しもな寝なへ
子ゆゑに (巻十四、三五五五)

①は「対馬の渡り」は神へと捧げる供物の意である「幣」
が詠み込まれ、②③は「神」を冠する「神の渡り」、④は「武
庫の渡り」は靈魂信仰に関する「たまはやす」が枕詞とし
てかかり、⑤⑥⑦は「宇治の渡り」に激しい威力を宿す靈
格を示す言葉である「ちはやぶる」が枕詞としてかかる、
など「神」に関するの語句が含まれる歌が七首ある。

つまり、①は和歌自体に「神」に関連する語句が詠み込
まれ、②③は「渡り」に「神」を冠し、④⑤⑥⑦は「渡り」
にかかる枕詞に超自然的靈格を宿していることが分かる。
ただし、残り二首は「神」に関する語句は見られない。

①の和歌は三野連が唐へ渡る時に一日も早い帰国を願っ
て作られた歌であり、対馬の港から出船の折には海原へ「幣」
を捧げなさい、と詠まれている。この「海原へ『幣』を捧

げなさい」には三野連に無事に帰ってきてほしい、という
思いが込められていることだろう。ただし、この詠歌には
旅中の無事を祈るだけでなく、同時に人々が海に神の威光
を感じていたことも分かる。それは「荒津の海我れ幣奉り
齋ひてむ早帰りませ面変りせず (巻十二、三三三二)」から
も同様のことが言えるだろう。また、当時の人々が海に神
の威光を感じていたことは『万葉集』中に「海神」を詠む
歌が十二例あることから窺えるのではないだろうか。

②③の和歌は、いずれも海の「渡り」である。その場所
はうねる波が海道を立ち塞がり、海風も穏やかではない、
と詠む。そうした波風の強さを「畏き」と感じているのだ
ろう。「神の渡り」は海難事故が多発するほどに通行の難
所であったに違いない。そうした畏怖が所以となり「神」
と冠する渡りの名称となったのだろう。土佐秀里氏も「あ
まをとめ玉求むらし奥つ浪恐き海に船出せり見ゆ (巻六、
一〇〇三、葛井大成)」や「大海の波は畏ししかれども神
を齋祀りて船出せばいかに (巻七、二二三二)」などを例に
あげ、「海」「波」を「畏し」と形容した例が見られるこ
とからも、荒れる波浪に人々が強い靈威を感じていたこと
が分かる」と指摘されている。

また、景行記には

其より入り幸して、走水海を渡りし時に、其の渡の神、

浪を興し、船を廻せば、進み渡ること得ず。爾くして、其の後、名は弟橘比売命、白ししく、「妾、御子に易りて、海の中に入らむ。御子は、遣さえし政を遂げ、覆奏すべし」とまをしき。

〔古事記〕中巻、景行天皇

と、弟橘比売命が人身供儀となることで「渡りの神」を鎮めることは土佐氏により指摘されている通りである。その他、応神記にも「渡りの神」は見られ、

是に、天之日矛、其の妻の遁げしことを聞きて、乃ち追ひ渡り来て、難波に到らむとせし間に、其の渡の神、塞ぎて入れず。

〔古事記〕中巻、応神天皇

と、妻の追う天之日矛の行く手を「渡りの神」が塞ぐ。いずれも渡り難い場所であることが「走水海」という激流の海であること、「難波」という地名からも分かる。「渡りの神」は「畏れ」られると同時に前述した応神記のように通行を妨げることから、時に人々を苦しめる災禍の源として討伐されたようである。

景行紀二十七年十二月、日本武尊が海路より倭に帰る折りに穴済の神と柏済の神を退治する。景行紀二十八年の春

二月の一日の条には

日本武尊、熊襲を平けし状を奏して曰さく、「臣、天皇の神靈を頼りて、兵を一たび挙げて、頓に熊襲の魁帥者を誅し、悉に其の国を平ける。是を以ちて、西州既に謚り、百姓事無し。唯し吉備の穴済の神と難波の柏済の神のみ、皆害ふ心有りて、毒氣を放ちて路人を苦しびしめ、並に禍害の藪を為れり。故、悉に其の悪神を殺し、並に水陸の徑を開けり」とまをす。
〔日本書紀〕卷第七、景行天皇二十八年春二月一日の条

と「吉備の穴済の神」と「難波の柏済の神」の二神を悪神と見なし、誅殺し水陸両路を開いたことが記される。

つまり、海の渡りには神がいる、と信じられるほどに荒れる海波には神の威光を人々は感じており、だからこそ畏れられていた。そして時に「渡りの神」は鎮められたり、悪神であると思なされ退治されたりもした。やはり「海を渡る」ということは通行上の難所であったのだらう。

その証拠に④は一見すると、武庫の渡し場で日が暮れると家のことばかり思う、という望郷の思いだけを詠んだ歌のようであるが、枕詞「たまはやす」と「天伝ふ」には神靈信仰を読み取れる。『時代別国語大辞典』では「たまはやす」を「おそらく魂^ニ賞^スであつて、何か信仰に關した

ものであろう」と記す。そのうえ『万葉語誌』で多田一臣氏は「天」を「神話的世界観において神々の住む天上世界をいうのが原義。後に、自然的存在としての天空をも意味するようになるが、その場合にも背後に天上世界の存在が意識されている」と解釈している。もちろん全ての和歌において「天」には天上世界の存在が意識されている、とは言えない。しかし枕詞「たまはやす」を考慮すると、④の和歌には海路に「神」の存在が意識されていたのだろう。では、川の渡りには靈威を感じられていなかった、というわけではない。⑤⑥⑦の如く「宇治の渡り」に「ちはやぶる」がかかる歌は『万葉集』だけでなく、同じ話が載っている『古事記』『日本書紀』などの古代歌謡にも二首ずつ見られる。

a ちはやぶる「宇治の渡り」に……（『古事記』五〇）・（『日本書紀』四二、ちはや人）

b ちはや人「宇治の渡り」に……（『古事記』五一）・（『日本書紀』四三）

a は兄の大山守命が弟の宇遲能和紀郎子を殺すことを謀略するも、逆に兄が騙し討ちされ川の中に落とされたときに兄が流されながら詠んだ歌である。それに対し、b は兄の遺体を引き上げたときに弟が詠んだ歌である。いずれも

「ちはやぶる」が詠み込まれている。なお、aのみ『日本書紀』では波線部が「ちはや人」に変わっている。

この「ちはやぶる」を多田氏は「ハヤは勢いの激しさを示し、ブル（フル）はその勢いが広範囲に發揮されている状態であることを表す。人間の生み出す秩序の外側にあって、その秩序を打ち破る恐ろしい力を意味する」と述べる。また、「ちはやぶる」は「神」を導く言葉にもかかる枕詞である。やはり宇治川が急流であり、通過することが困難だったことから「宇治」に「ちはやぶる」がかかるのだろう。したがって『万葉集』の「渡り」歌は、①和歌自体に「神」に関連する語句が詠み込まれ、②③は「渡り」に「神」を冠し、④⑤⑥⑦は「渡り」にかかる枕詞に超自然的靈格を宿している、と分析できる。このことから万葉人が「渡り」に「神」の存在を意識していたことが分かる。人々にとっては「神」こそが崇りを及ぼす存在であり、反対に「神」こそが加護を授けてくれる存在であったのだ。その期待の裏には畏怖を感じていたのだろう。

他、⑧「荒磯の渡り」はその名称の如き様であっただろうし、⑨「許我の渡り」は所在地未詳であるが、もし『五代集歌枕』が示す「下総国」であったならば、西行法師が武蔵国と下総国との国境付近で「霧深きこがの渡り」の渡し守岸の船着きおもひさだめよ（『万代和歌集』巻十七、三四二九）と詠んだ場所である。いずれも渡り難い

場所であつたことが窺える。

万葉人にとつて川海の「渡り」とは、旅中において通行上の難所であつたに違いない。

四、平安時代以降の「狭野の渡り」について

ところで、左の歌『万葉集』一二二六番歌は当該歌の「神の埼狭野の渡り」と同所の和歌山県新宮市三輪崎と考えられていようである。

三輪の崎荒磯も見えず波立ちぬいづくゆ行かむ避き道
はなしに

〔万葉集〕卷七、一二二六〇

波線部は原文表記で「神前」であり「神」を冠するが、もし二六五番歌「神の埼」と同所であれば、より紀伊説が有力になろうか。また、当該歌「狭野の渡り」は「避き道はなし」と詠むほどに渡り難い場所であつた可能性も考えられる。

神武紀即位前期戊午年六月二十三日の条に見える「狭野」と当該歌「狭野の渡り」を同所と考えられていること及び、畏敬すべき伝承地として「神の埼」の名称である、と主張されていることは前述した通りである。土佐氏はその神武紀を例にあげ「この地で海難に遭い、結局、神武の兄であ

るイナヒとミケイリヌ（ノ）の二人が人身御供として入水することになる。意吉麻呂の「神の埼狭野の渡り」が、この伝承を想起させるべく用いられている地名である可能性も考えられるだろう。そうだとすれば、そこには海難と死の記憶が刻印されていることになる」と指摘される。「神の埼狭野の渡り」が紀伊国であるという土地柄を考慮すると、その神性は無視できない。神代紀一書第五には

一書に曰く、伊弉冉尊、火神を生みたまふ時に、灼かれて神退去ります。故、紀伊国の熊野の有馬村に葬りまつる。土俗、此の神の魂を祭るには、花の時には亦花を以ちて祭る。又鼓・吹・幡旗を用ちて、歌舞ひて祭る。

〔日本書紀〕卷第一、神代上一書第五

と、伊弉冉尊が紀伊国の熊野に葬られ、その土地の人々に祀られていたことが分かる。古来、紀伊国の熊野が神聖な土地であつたことが分かるだろう。

そのような土地へと奥麻呂は赴いたのである。任地や目的の地へと赴く官人たちの孤独感や羁旅歌などに詠まれる通りだ。「旅」をする、ということとは、安心できる「家」から離れる、ということである。その過酷さは「死」と隣り合わせだった。それこそ「天地の神も助けよ草枕旅行く君

「家に至るまで（巻四、五四九）」と、「神」に祈るほどに旅中の無事を願ったほどである。そうしたことを踏まえると、旅先で奥麻呂が妻子の待つ家を恋しく思うのは当然である。況してや、畏敬された神聖な土地で「雨」が降つて来るのである。「苦しくも」には、そんな奥麻呂の孤独と望郷の思いが込められているのかもしれない。単純に苦しくも降り来る雨から逃れるべく雨宿りする家がない、と詠んでいるわけではないのだ。

しかし、後に本歌取りされた作品を見ていくと、「家もあらなくに」の結句は「雨宿りする家もない」と解釈されていたようである。前述したが『八雲御抄』巻五「渡」の項目には「みわのさき。家なし。さの、渡は家なしと万葉にもいへり」の如く当該歌はそうように解釈されていたわけである。

平安時代以降の「狭野の渡り」は和歌だけでなく、物語や紀行文などに見られ『宇津保物語』『源氏物語』『吉野話記』『佐野のわたり』『雨月物語』『紫の一本』などの作品で「狭野の渡り」が見出せる。特に『源氏物語』『東屋』『佐野のわたり』『雨月物語』では

雨や降り来れば、空はいと暗し。宿直人のあやしき声したる、夜行うちして、「家の辰巳の隅の崩れいと危し。」この、人の御車入るべくは、引き入れて御門

鎖してよ。かかる、人の供人こそ、心はうたてあれ」など言ひあへるも、むくむくしく聞きならはぬ心地したまふ。「佐野のわたりに家もあらなくに」など口ずさびて、里びたる簀子の端つ方にあたまへり。

さしとむるむぐらやしげき東屋のあまりほどふる雨そそきかな

とうち払ひたまへる追風、いとかたはなるまで東国の里人も驚きぬべし。

（『源氏物語』『東屋』）

さて、廿四日、初瀬路に出立ちて、三輪が崎行くほど、雨俄に降りきぬ。かの万葉の古言たゞ今のやうに思ひ出られて、「雨宿りを」など人々言ひしも、「いづにか家もあらん」と、濡れく行く過るに、飽かぬ心地して、返すく「佐野のわたりに」などうち吟じつ、泊瀬寺に着きぬ。

（『佐野のわたり』）

女、「しばし宥させ給へ」とて、ほどなき住ひなればつひ並ぶやうに居るを、見るに近まさりして、此の世の人とも思はれぬばかり美しきに、心も空にかへる思ひして、女にむかひ、「貴なるわたりの御方とは見奉るが、三山詣やし給ふらん。峰の温泉にや出で立ち給

ふらん。かうすぎまましき荒磯を何の見所ありて狩くら
し給ふ。ここのなんいにしへの人の、

くるしくもふりくる雨が三輪が崎佐野のわたりに
家もあらなくに

とよめるは、まことけふのあはれなりける。(註二十)

『雨月物語』卷之四、蛇性の姪

と、当該歌を意識した場面が登場する。『源氏物語』は薫
が隠れ家の三条の小屋にいる浮舟を訪問し、簀子の端で待
たされていたときの場面である。このとき雨が降ったのを
見て、薫は「さしとむるむぐらやしげき東屋のあまりほど
ふる雨そそきかな」と詠んだ。この和歌が巻名の由来であ
るほどに、この場面は重要であったことが分かる。

また、『佐野のわたり』は宗碩が伊勢へ下向する途中に
「三輪が崎」に行くとき雨が降ったので、『万葉集』二六五番
歌を思い出し「佐野のわたり」と吟じた。ただし、宗碩
著『佐野のわたり』の「三輪が崎」は紀伊国ではなく、大
和国である。この頃には既に『五代集歌枕』や『八雲御抄』
のように誤認されていたのだろう。また、跋文には「此旅
の日記は、三輪が崎の雨の景色忘れがたきにより記しつけ
侍れば、佐野のわたりとや申すべからん」とあるほどに、
宗碩にとって古歌を想起させるような情景は感動するもの
だったのでろうし、『源氏物語』同様に書名の由来となる

場面である。ただし、当該歌が紀伊国だとすれば、宗碩が
見た古歌の如き情景と実際に奥麻呂が詠んだ情景は全く異
なり、的外れになってしまう。

そして、『雨月物語』は紀伊国の三輪が崎に住む大宅豊
雄が激しい雨から逃げるようにその辺の漁師小屋に立ち入
り雨宿りしていると、暫くして美しい女が訪ねて一緒に雨
宿りすることになった。当該歌を諷んじて古の歌人が詠ん
だ土地と紹介し、今日はそっくりそのような風情である、
と大宅豊雄が女に言う、その一場面である。この物語では
「三輪が崎」「佐野」が大和国ではなく、紀伊国として出る
のは興味深い。ここでは本筋から逸れてしまうので指摘
するに留める。『雨月物語』は当二六五番歌全てを引用し
ている。

いずれも「雨」が降り、「佐野のあたり」には「雨宿り
する家」がない、という意で用いられていることが窺える。
前述した通り、当該歌「家もあらなくに」は「妻子がいる
家もないのに」と解釈すべきだが、平安時代以降、そのよ
うな意味は消失していると言つてよい。強いて言えば『万
葉集』中の「海原に浮き寝せむ夜は沖つ風いたくな吹きそ
妹もあらなくに(巻十五、三五九二)」や「筑紫に廻り来り、
海路にて京に入らむとし、播磨国の家島に至りし時に作る
歌五首」が題の「家島は名にこそありけれ海原を我が恋ひ
来つる妹もあらなくに(巻十五、三七一八)」の如く、「家

もあらなくに」は「妹もあらなくに」と同義で使用される。

また、当該歌「狭野の渡り」の「渡り」は旅中の歌ということもあり、岸から岸へと移動することが想定されるが、定家が詠んだ「駒とめて袖うちはらふ陰もなし佐野のわたりの雪の夕暮」含め、「源氏物語」「東屋」「佐野のわたり」「雨月物語」は移動する「渡り」としての意義が全くないのである。平安時代以降「家もあらなくに」を「雨宿りする家」と解釈されていたことを考えると、当該歌「渡り」を「辺り」として解釈することも致し方ない。なぜなら、その意でも通ずるからである。そして、定家が「袖うちはらふ陰もなし佐野のわたりの雪の夕暮」と本歌取りした結果、益々奥麻呂が伝えたかった歌とはかけ離れた趣旨が広まっていたのだらう。

したがって、定家が詠んだ歌の本歌取りとして有名な当該歌であるが、定家の歌と奥麻呂の歌は趣意が異なるものである。後世において「家もあらなくに」の趣旨は伝わることなく、歌枕「狭野の渡り」は「佐野の辺り」に変質していったと見るべきである。

五、まとめ

従来、専ら『万葉集』二六五番歌「苦しくも零り来る雨か神の埼狭野の渡りに家もあらなくに」は「神の埼」や「狭野の渡り」の所在地について論じられてきた。その所在は

大和説、近江国説、紀伊説、和泉説の四説があるが、現在は紀伊国を有力とする説がほとんどである。ただし、そうした地理的比定に留まるばかりで当該歌の歌枕「狭野の渡り」についての考究はあまりされていない。

もし、「神の埼狭野の渡り」が紀伊国だとすれば、神武紀即位前期戊午年六月二十三日の条に見える「遂に狭野を越え、而して熊野の神邑に到り」の文にある「狭野」と当該歌「狭野の渡り」は同所であり、かつ稲飯命と三毛入野命が海に入って人身御供となった畏敬すべき伝承地として「神の埼」の名称であることが考えられ、その土地柄を考慮すると「神の埼」は神聖な土地であることが言える。また、この地は暴風が吹くほどに海は荒れ、それにより稲飯命と三毛入野命が海に入って人身御供となった場所である。それ故に、通行上の難所として「死」を想像してもおかしくはない。

そもそも万葉人にとって「旅」とは「死」と隣り合わせであった。そのような旅中で「渡り」とは通行上の難所であったことは想像に難くない。それを称するかの如く『万葉集』の「の渡り」歌には「神」に関する語句を詠み込むもの、「神」を冠する「渡り」があるもの、「渡り」に超自然的な霊格を宿す枕詞がかかるもの、などがあり、それほどまでにその場所が甚だ渡り難い場所であった。そして、そのような場所には畏怖を感じていたことだらう。「神」

こそが加護を授けてくれる存在だと認識していながら、通行を妨げ、死の危険すらある荒れ狂う海波に霊威を感じていたのである。

「神の埼狭野の渡り」もまた、そのような土地であり、『万葉集』巻九、一六七三番歌「大宝元年辛丑の冬十月に、太上天皇・大行天皇、紀伊国幸せる時の歌十三首」の題詞通り長忌寸意吉麻呂が紀伊国への行幸に従ったと考えると、旅先で妻子の待つ家を恋しく思うのは当然であろう。況してや、「雨」が降って来るのであるから、益々奥麻呂の孤独と望郷の念は強まったに違いない。当該歌は旅の苦難と寂寞を訴える歌である。しかし、後世においては紀伊国「神の埼狭野の渡り」という場所の畏れや旅先で妻子を恋しく思う等、本来の奥麻呂の歌の趣旨とは異なってしまうている。当該歌は決して、苦しくも降り来る雨から逃れるべく雨宿りする家がないほどに狭野のあたりには何も無い、と詠んでいるわけではないのだ。

(※本文中の傍線部と波線部等は私的に付したものである。)

【参考文献】

- 『新考』…井上通泰『万葉集新考』国民図書、一九二八年
『口訳』…折口信夫『口訳万葉集』(池澤夏樹編『日本文学全集02』河出書房新社、二〇一五年所収)

『新訓』…佐佐木信綱『白文 万葉集 上巻』岩波書店、一九三〇年

『講義』…山田孝雄『万葉集講義 卷第三』宝文館、一九三七年

『全集』…鴻巣盛廣『万葉集全釈』広文堂書店、一九三五年

『総釈』…吉澤義則・石井庄司『万葉集総釈第二』楽浪書院、一九三五年

『窪田評釈』…窪田空穂『窪田空穂全集第十四卷 万葉集 評釈Ⅱ』角川書店、一九六六年

『全註釈』…武田祐吉『万葉集全註釈三』改造社、一九四九年

『私注』…土屋文明『万葉集私注二 新訂版』筑摩書房、一九七六年

『大系』…高木市之助ら『日本古典文学大系4 万葉集一』岩波書店、一九五七年

『注釈』…沢瀉久孝『万葉集注釈 卷第三』中央公論社、一九五八年

『全集』…小島憲之ら『日本古典文学全集2 万葉集一』小学館、一九七一年

『集成』…青木生子ら『新潮日本古典集成 万葉集一』新潮社、一九七六年

『全訳注』…中西進『万葉集 全訳注原文付』講談社、一九八四年

『全注』…西宮一民『万葉集全注 卷第三』有斐社、一九八四年

一九八四年

『新全集』…小島憲之ら『新編日本古典文学全集 万葉集①』

小学館、一九九四年

『新大系』…佐竹昭広ら『新日本古典文学大系 万葉集二』

岩波書店、一九九九年

『釈注』…伊藤博『万葉集釈注二』集英社、一九九六年

『和歌大系』…稲岡耕二『和歌文学大系 1 万葉集(一)』

明治書院、一九九七年

『全歌講義』…阿蘇瑞枝『万葉集全歌講義 第2巻』笠間

書院、二〇〇六年

『全解』…多田一臣『万葉集全解』筑摩書房、二〇〇九年

片桐洋一編『歌枕歌ことば辞典』角川書店、一九八三年

久保田淳馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』角川書店、

一九九九年

久曾神昇『五代集歌枕』(『日本歌学大系別巻一』風間書房、

一九五九年所収)

久曾神昇『八雲御抄』(『日本歌学大系別巻三』風間書房、

一九六四年所収)

山口佳紀・神野志隆光『新編日本古典文学全集 1 古事記』

小学館、一九九八年

小島憲之ら『新編日本古典全集 2 日本書紀』小学館、

一九九八年

小島憲之ら『新編日本古典全集 6 万葉集』小学館、一九九四年

上代語辞典編集委員会『時代別国語大辞典 上代編』三省

堂、一九八三年

『新編国歌大観』角川書店、一九八三年

【注記】

(注一) 小沢正夫・松田成穂『新編日本古典文学全集 11

新古今和歌集』小学館、一九九四年

(注二) 中村一基『近世国学者の名所研究——「神之埼狭

野渡」紀伊説成立をめぐる——』(大久保正編『万

葉とその伝統』桜楓社、一九八〇年所収)

(注三) 猪股静彌「奥麿の佐野の渡りの歌一首攷」(『青吹

く風万葉集論攷』和泉書院、一九九四年)

(注四) 小島憲之ら『新編日本古典文学全集 2 日本書紀①』

小学館、一九九四年

(注五) 一木一郎「神之崎狭野乃渡余」私考(『日本大学

国文学会『語文』第四十三輯、一九七七年五月所収)

(注六) 草野隆「佐野の渡り」(『歌ことば歌枕大辞典』所収)

(注七) 平安から近世に及ぶ所在地の考証については、中

村一基氏の論文にて詳細に分析されている。地理考証の研究論文としては新垣幸得「苦しくも降り

来る雨か三輪の崎」考」(日本大学国文学会『語文』

第四十三輯、一九七七年五月所収)、一木二郎『「神

之崎狭野乃渡余」私考」、高橋良雄『「佐野の渡り」

と「佐野の船橋」——歌枕の所在の流動——』(昭

和女子大学近代文化研究所『学苑』一九八六年一

月所収)、島津聿史『「神之崎狭野之渡」——紀伊

万葉をめぐる一考察——』(日本大学国文学会『語

文』第三十三輯、一九七〇年五月所収)、川上富吉『長

忌寸意吉麻呂伝考』(大妻女子大学『大妻女子大学

文学部紀要』第3号、一九七一年三月所収)、猪股

静彌『奥麿の佐野の渡りの歌一首放』があげられる。

中村氏・新垣氏・一木氏・高橋氏が紀伊説、島津

氏・川上氏が近江説、猪股氏が大和説を主張する。

本稿でも述べたが各注釈書は紀伊説を採り、『私注』

のみが和泉説を主張する。また、村瀬憲夫『難波

の海・紀伊の海』(『高岡市万葉歴史館論集』水

辺の万葉集』笠間書院、一九九八年所収)では当

該歌を紀伊に属する和歌として取り上げている。

伊藤博『家と旅』『萬葉集の表現と方法』下『塙書

房、一九七六年

(注九) 犬養孝『万葉の旅(中)』社会思想社、一九六四年

(注十) 久松潜『苦しくも降り来る雨か』(『国文学—解釈

六月所収)

(注十二) 新垣幸得『苦しくも降り来る雨か三輪の崎』考」(日本大学国文学会『語文』43輯、一九七七年五月所収)

(注十二) 土佐秀里『苦しくも降り来る雨か』考」(早稲田古代研究会『古代研究』第48号、二〇一五年二月所収)

(注十三) 真鍋次郎『家もあらなくに』(萬葉学会『萬葉』74号、一九七〇年十月所収)

(注十四) 吉井巖『いへ・やど・やね』(萬葉学会『萬葉』104号、一九八〇年七月所収)

(注十五) 阪倉篤義・浅見徹『一語の辞典』『家』三省堂、一九九六年

(注十六) 『新考』「ワタリは久老アタリの意にはあらで渡津の意なるべしといひ雅澄は『アタリをワタリといふ事は此集の比はすべてなかりき』といへり。」及び「講義」『渡』は「ワタリ」とよむ。久老は「ワタリ」は「あたり」の意なりといひたれど、古義にいへる如く、その頃にそれは未だ無かりし詞と思はる。これは後世、「ワタシ」といふになじく川を横ぎり渡る所をいふ。この佐野の地の南に河あれば、その渡をいへるなるべし。」や『総釈』「わたりとは渡場の意。後世の「あたり」に用ひた

例は萬葉にはないようである。「窪田評釈」「渡」は佐野の南に川があるので、その徒涉池であろうという。上代は特別な路でない限り川に橋がなく、徒涉するのが普通であった。などのように各注釈書は当該歌の「渡り」を「渡し場」として解釈する。ただし、『新全集』のみ「辺り」として解釈する。

(注十七)『万葉集』の「渡り」に関しては、和田明美氏の「古代日本語『しかすが』歌枕『しかすがの渡り』考」(美夫君志会『美夫君志』九十六号、二〇一八年三月所収)にて詳細に分析されている。和田氏も指摘される通り、『万葉集』中の「渡り」地名歌のうち、平安時代以降の歌枕として受容があるのは「宇治の渡り」「狭野の渡り」「許我の渡り」である。また、和田氏は『万葉集』の「渡り」関連の二九例中二三例(約45%)が七夕歌であり、「渡り・渡り守」は全例「天の川」関連の歌である」と指摘されている。

(注十八)神武紀、戊午の年春二月十一日の条には「皇師、遂に東し舳艫相げり。方に難波の碇に到るときに、奔潮有りて太だ急きに会ふ。因りて名けて浪速国と為ふ。亦浪花と曰ふ。今し難波と謂へるは訛れるなり。訛、此には与許奈磨廬と云ふ」と、記さ

れている。天皇軍が難波の碇まで来ると、甚だ速い潮流に出合う。その場所を名付けて浪速国または浪花国とも呼んだらしい。今の「難波」というのは訛ったものである。この記事から「難波」が甚だ潮流が速いことが分かる。

(注十九)多田一臣「天」(多田一臣編『万葉語誌』筑摩書房、二〇一四年)

(注二十)『歌枕歌ことば辞典』「千早振る」所収。

(注二十一)多田一臣氏は「天」の強い呪力を宿して「天」から降るものが、「雨」である」と『万葉語誌』の中で述べる。土佐氏は「苦し」は恋と旅について用いられることが多く、「雨」そのものが苦しいというより、その降雨によって喚起された愛着の対象と、それに対する絶望的な距離感の自覚が「苦しい」ということになりはしないか」と主張する。

(注二十二)『万葉集』中には「家もあらなく」と詠んだ和歌が二首ある。そのうちの一方は当該歌であるが、もう一方は当該歌に非常に類似した点を見出せる。「大口の真神の原に降る雪はいたくな降りそ家もあらなくに(巻八・一六三六・舍人娘子)」もまた、地名に「神」の名を冠し、天からは雪が降る。当該歌と同じことが言えそうである。

(注二十三)『宇津保物語』は「佐野のわたりの司」、『吉野

詣記』と『紫の一本』は当該歌を引用するのではなく、どちらも定家が詠んだ和歌を引用している。『吉野詣記』は「これより範堯は帰りにけり。佐野の渡過ぐるほど風いたく吹きて、雨風にやなど申しければ、空は一点の雲もなし」の後「俄にも降りこん雨の雲もなし駒うち渡す佐野の夕風」と詠む。『紫の一本』には「冬枯れの野辺の気色も物淋しく、風まぜに降る雪は、見るが内に垣を埋み、窓の呉竹は折れ伏せども、隣をみする家もなし。草木いまだ春ならずして花事動き、乾坤いまだ夜らずして月花あらたなり。かの野亭の雪と云ふ題にて、国房の朝臣の「いかにせよとか雪の降るらん」と淋しさ侘びたる古へも、いまさら思ひ出られたるに、西の方は浅草川にて、芦間漕ぐ棚なし小船も、雪を乗せ棹さしかねて、佐野の渡りにはあらねども、「袖うち払ふ影もなし」と凌ぎかねたるありさま、あはれに淋しと見ゆ」とある。本文は『新編日本古典文学全集』に拠った。

(注二十四) 阿部秋生ら『新編日本古典文学全集25 源氏

物語⑥』小学館、一九九八年

(注二十五) 福田一秀ら『佐野のわたり』(『新日本古典文

学大系 中世日記紀行集』岩波書店、一九九〇年

所収

(注二十六) 中村幸彦ら『新編日本古典文学全集78 雨月

物語』小学館、一九九五年

※なお読みやすさを考慮して一部旧字は新字に改めた。

【付記】

本稿は平成三十年度大東文化大学院の授業において発表したものに加筆修正をしたものである。ご教示くださった方々に厚く御礼申し上げます。